

「教育臨床総合研究20 2021研究」

## 漫画『約束のネバーランド』にみる思春期の終わり

## The End of Puberty in “the Promised Neverland”

西 嶋 雅 樹\*

Masaki NISHIJIMA

## 要 旨

本研究では思春期がどう終わるかに関する理解を深めるために、漫画『約束のネバーランド』を素材として考察を行った。物語終盤で描かれる2つの世界の間の渡りは意識と無意識の混濁した状態から意識の優位な状態への移行のメタファとして理解されることが見出された。また物語が終わることに並行して主人公のエマは親、家族、双子的存在、そして異能性の喪失を体験しており、ここに思春期の終焉の特徴が見出された。

〔キーワード〕 『約束のネバーランド』, 臨床心理学, 物語, 思春期, 喪失

## I はじめに

思春期とはいかなる時期なのか。

子ども時代の自立のテーマに関する理解を拡充するために、筆者は西嶋（2020）で漫画『約束のネバーランド』を素材として考察を行った。本研究はその続編にあたる論考であり、特に同作品の終盤の展開を素材として取り上げるものである。

本稿では、思春期がどのように終わっていくかに関する示唆を『約束のネバーランド』から得ることを目的とする。この取り組みは、作品に内包されたイメージを臨床心理学の立場から読み解こうとする取り組みである。臨床心理学の領域でのこうしたアプローチの先行例としては、児童文学や日本の昔話を素材とした河合（1989）や『陰陽師』や宮崎アニメを素材とした岩宮（2000, 2013）が代表的なものとして挙げられる。筆者も西嶋（2010）で『蟲師』について、西嶋（2021a, 2021b）で『鬼滅の刃』について同種の試みを展開してきた。これらの取り組みから得られる知見は心理臨床のみならず、広く子どもに関わる諸領域、たとえば教員養成などにも、特に生徒指導や教育相談の文脈へと還元できるものであると考えられる。

上述のように、本研究では『約束のネバーランド』という物語の結末の迎え方に特に焦点を当てる。その理由として、詳しくは後述するが、この物語の終わり方が思春期という時代の終わり方について豊富な示唆をもたらす物語であるという点が挙げられる。

\* 島根大学学術研究院教育学系

なお思春期と似た意味の言葉として、青年期という語がある。この2つの語の使い分けについては、思春期は第二次性徴に始まる身体的あるいは情緒的な変化の時期であり、青年期は心理社会的な変化の時期であるという清水（2003）の説明がわかりやすい。加えて伊藤（2006）は子ども時代から大人時代への過渡期を表すこの2つの概念には重なり合う部分も大きいとしつつ、時期としては思春期が青年期に先駆けて始まると整理している。その上で伊藤は思春期の特徴として「子どもでもない、おとなでもない」「その境界線上にある」「中途半端な時期」を挙げている。

本稿で扱う『約束のネバーランド』では「境界」や過渡ということがまさしく重要なテーマとなる。そのため登場人物たちの年代も想定し、伊藤が述べる特徴を色濃く表現する言葉として思春期の語を用いるものとする。

## II 『約束のネバーランド』とは

考察の本題に進む上で、作品についての概要を、特に主人公らがどのような状況におかれていたのかを理解するための情報として以下に記す。

### 1 序盤のあらすじ

『約束のネバーランド』（白井・出水、2016-2020）は、白井カイウ（原作）と出水ぽすか（作画）による漫画である。この作品は、2016年8月1日から『週刊少年ジャンプ』（集英社）で連載が開始され、2020年6月15日をもってその連載に幕を下ろした、単行本としては全20巻の作品である。

主人公はエマという名の少女で、エマは幼い頃から「グレイス＝フィールドハウス（以下GFハウスと略記する）」という名称の孤児院で他の子どもたちと共に暮らしている。この孤児院にはエマと同年のノーマンとレイという2人の少年がいて、エマを加えたこの3人を中心に物語が展開していく\*1。

孤児院という名の「農園」で子どもたちが「出荷」用の「食用児」として育てられていること。孤児院で「ママ」と呼ばれ子どもたちの敬愛を集めている女性が子どもたちの育成と出荷をコントロールしていること。そして食用児を求める存在として異形の「鬼」が存在すること。これらの事実が第1話で明らかとなる。この「ママ」であるイザベラをいかに出し抜いてGFハウスから脱獄するかということを中心に、物語の序盤が展開していく。

このように『約束のネバーランド』は、作品のジャンルとしては、ダーク・ファンタジーの冒険ものの作品として位置づけられる\*2。

### 2 『約束のネバーランド』における鬼

同時期に同じく『週刊少年ジャンプ』で連載されていた作品に『鬼滅の刃』（吾峠呼，2016-2020）がある。『約束のネバーランド』を理解する上では『鬼滅の刃』との対比が有効である。ここでは2つの作品の対比を通して『約束のネバーランド』の概説を続ける。

『鬼滅の刃』と『約束のネバーランド』の共通点としては、主人公達の生存を脅かす存在として両者に「鬼」が登場するという点が挙げられる。そして『鬼滅の刃』の鬼は頸<sup>くび</sup>が、『約束のネバーランド』の鬼は目がそれぞれ急所であるが、その箇所を損傷されない限りは傷を再生

することができるという点も共通事項として挙げられる。

しかし『鬼滅の刃』の鬼は人間が変貌したものであるのに対して、『約束のネバーランド』の鬼は人間とは別に発生した存在である。また、両作品に共通して鬼は人を食べるが、『鬼滅の刃』の鬼は人間のみを食べるのに対して、『約束のネバーランド』の鬼は人間以外の生物も食べるという相違もみられる。

この点だけを見ると『約束のネバーランド』の鬼は野生動物に近い存在である。事実、野生化して「野良鬼」と呼ばれるような鬼もいる（第42・49話）。その一方で『約束のネバーランド』の鬼の中には王制を敷き、独自の文化を持つ者たちもいる。また野良鬼の中には鬼の政争に敗れて「野良落ち」の刑により身をやつした者がいることも明かされていて（第147話）、鬼の様態は変動しうるものであることがわかる。

同じ鬼という種族でもこれだけかけ離れた様態をとるのは、ひとえにその食物の影響による。食べるものによって高い知能が保たれたり、野生に落ちて知性を失ったりと様々に分岐するのが『約束のネバーランド』における鬼である。これらの鬼はノーマンの言によれば「食べたものの遺伝子を取り込み その形質を受け継ぐのだ（中略）そして“彼ら”はやがて ヒトを食べた そうしてヒトに似た姿と高度な知能 言葉や文化を獲得した」（第120話）。ゆえにこの鬼たちは一部の例外を除いて「食べ続けなければ形質を保ってられない」（同）。だから鬼は人間を食用児として育て、食べるのである。

つまり、『鬼滅の刃』の鬼が人間の存在無くしては発生しなかったのと同様に、『約束のネバーランド』の鬼も、特に王政の仕組みの中にある鬼は、人間の存在に依存した生物であることがわかる。

その『約束のネバーランド』の鬼たちは、自分たちの食料として人間を育て、食べるという社会システムを構築している。

人間の中にも、上質な脳を育てるために恵まれた環境で育てられる者がいる一方で、粗悪だけれども大量生産が可能なプラントで育てられる者もいる。さらに飼育監や飼育者として鬼の下でこれらの「農園」の維持に当たる者もいる。この点において、人間も鬼も、格差の大きい中で生活をしていることが共通している。

鬼によるこの世界の中で、主人公であるエマらは食用児として育てられている。自分たちが「出荷」されるために育てられているという事実のエマとノーマンの2人が気付くことから、物語は幕を開ける。

### Ⅲ 物語の終わりと思春期の終わり

#### 1 2つの世界

『約束のネバーランド』では物語が進むにつれて、エマらのいる世界（「鬼の世界」と呼ばれる）とは別に「人間の世界」が存在することが明らかとなる。

イザベラとの駆け引きを制してGFハウスを脱獄したエマらは、ハウスの外の世界で窮地に立たされる中で、放浪する鬼のムジカとソングジュに救われる。行動を共にするようになったエマとレイに、ソングジュは今の世界の成り立ちを説明する（第47話）。ここで語られるのは、鬼と人間が同じ世界に暮らしていた頃、鬼は人間を狩る存在であったが人間も鬼に反撃をするよ

うになり、双方共に殺し合いが続く時代があったという過去である。そして、人間も鬼も互いを狩らずに世界を棲み分けるという取り決めが交わされたことが明かされる。このように鬼と人間の世界が分かれたのは、作中の主人公らの時代から千年前\*<sup>3</sup>のことである。

エマたちが生まれた鬼の世界は、GFハウスなどの「農園」で何も知らずに平穏に暮らしている分には満ち足りた地ではある。ただし一度ハウスの裏の顔や外の世界のことを知ってしまうと、世界は信頼した人が敵であったり、食う－食われるの関係に支配されている、さながら悪夢のような世界となる。

しかし物語が進展するにつれてエマらには徐々に仲間が増え、鬼の王制のトップに君臨する鬼（女王レグラヴァリマ）との対決にも幕が下りる。やがてエマらは、かつて対立した「ママ」であるイザベラらとの和解も果たす。

その世界からエマらは、人間たちが科学技術に支えられた生活をする2047年の人間の世界に旅立つ（物語中ではこの移行は「渡る」とされている）。人間と鬼とが共存していた世界から、人間だけの世界に移行するのである。

鬼の世界では千年にわたる支配を続けた王制が主人公らによって崩壊し、人間の世界では2020年～2030年代に度重なる異常気象や10年に及ぶ世界大戦を経て、人類が共存を目指す世界への再構築がされている（第179話）。エマらが世界を渡るのに先駆けて、2つの世界のそれぞれが大きな転換点を迎えて再構築されていることがわかる。

なお『約束のネバーランド』では物語の終わりに際しても、分かれていた2つの世界が統合されるということはない。その意味ではそれぞれの世界が分断されたままに物語が終わりを迎えているかのように見える。しかし統合されず、往来が絶たれようとも、2つの世界は時期をほぼ同じくして抜本的な変化をそれぞれに経ている。すなわち、通底した変容という形でのつながりを見せてもいる。

ところで、私たちが睡眠中の夢から覚めた際によく体験することとして、確かに夢は見ているのだけれども、夢で何を体験していたのか思い出せないという体験がある。あるいは、思春期の心身の動乱という渦中で荒れていた子どもたちが、その時期をくぐり抜けると何事もなかったかのようにけろっとした姿でまた日常生活を送る姿にもしばしば出会う。

『約束のネバーランド』の終盤における子どもたちの鬼の世界から人間の世界への渡りは、意識と無意識が混濁した状態にあった思春期的な自我から明瞭な意識の世界という大人の自我に軸足を移したことの比喩としても捉えられる。すなわちこの物語の終盤は夢や思春期の終わりの到来を連想させる構造の中にある。そして、2つの世界は独立しているように見えながらも、全体としてのまとまりの中で変容が展開している。このことから両世界は、いわゆる夢と現、無意識と意識のような関係の中にあると理解される。

## 2 始まりの場所に戻る

世界の渡りに先駆けてエマら食用児たちは、必死の思いで脱獄をしたGFハウスに物語の終盤で再度戻る。それは、GFハウスの地下に外の人間の世界に渡るポイントがあるからである（第178話）。このポイントの存在はウィリアム・ミネルヴァことジェイムズ・ラートリーによって比較的早い段階で明かされている（第72話）。

物語を通じてエマがたどった軌跡を考えると、GFハウスからの脱獄以降は世界をさすらう中で、時に危険に瀕したり、仲間を増やしたり、この世の時空を超越した世界に誘われたりしながら、元いたGFハウスに一周回って戻ってくるという軌跡をたどっている。物語を経た上で始まりの場所が終わりの場所に転換する。『約束のネバーランド』のこの構造を理解する上で、Maeterlinck, M.の『青い鳥』を援用する\*4。

『青い鳥』の冒頭部分でチルチルとミチルは、妖精ベリリユンヌによって世界を構成する物事の本質を見せられる。一方で『約束のネバーランド』の冒頭部分でエマとノーマンは、ママと慕ったイザベラの飼育監としての顔やその背後にいる鬼の存在を知ることとなる。

『青い鳥』と『約束のネバーランド』の両者において、主人公は自分たちが見ていた世界が一面的なものであったと序盤で気づきを得る。この点が2つの物語の両者に共通している。

さらに『青い鳥』では、ベリリユンヌに言われた青い鳥を探して旅をしたチルチルとミチルは、探し求めたその鳥が自分たちの生家にいることに気づく。また『約束のネバーランド』では食用児としての運命から逃れるためにハウスを脱獄したエマらは、鬼の世界から脱出する通路が、かつて自分たちが旅立ったGFハウスの中にあることに気づく。このように『約束のネバーランド』は、旅を経て最初の場所に戻るという構成をとっている。この構成は『青い鳥』を彷彿とさせる構成である。

ただし『青い鳥』と『約束のネバーランド』の構成には大きな違いもある。『青い鳥』では一巡りして帰ってきた家で物語が完結する。それに対して『約束のネバーランド』では、そこからさらに外の世界への動きが生まれる。つまり『約束のネバーランド』は鬼の世界での循環に続けて、最後に人間の世界への渡りという移行が組み込まれているという点を特徴とする物語である。

この移行は、主人公であるエマの思春期の終焉を考える上での契機ともなる。以下この点について、とりわけ最終巻である第20巻（第172話～181話）に見られるエマの喪失という観点から4つの考察を行う。

### 3 エマの喪失①—親—

『約束のネバーランド』の初期の喪失は、西嶋（2020）で述べたようにその序盤に当たるGF編で、親からの自立という節目においてイザベラとノーマンの喪失として描かれている。この両者とは物語が進展する中でそれぞれ再会を果たす。しかしエマは、生きて再会を果たしたイザベラと再度の別れを迎える。

イザベラとの最初の別れはGFハウスからの脱獄、すなわち両者の離別という形での、自立に向かう別れであった。しかしイザベラとの二度目の別れは、エマを守ろうとしてイザベラが命を落とすという、終の別れである（第177話）。

一度目の別れがイザベラとの決別であったとすると、二度目の別れはエマらにとっては文字通りの看取りである。取り返しの利かない親の喪失が、鬼の世界から渡る直前のイベントとして描かれている。



図1 「鬼の頂点」の名を示す記号（単行本第6巻 p.111より引用）

#### 4 エマの喪失②—家族—

エマだけでなくレイやノーマンらは、人間の世界に渡る際に大きな代償を払う。それは、世界を渡る際にエマだけが皆と違うところに転移し（第179話）、しかも鬼の世界での記憶を喪失する（第180話）という代償である。エマとレイ、ノーマンらと共にいた歴史や記憶が、エマの側からは一切喪われているという事態である。

離ればなれになるばかりか、ノーマンやレイが苦勞の末にエマを探し当てても、エマは彼らのことを覚えていない。これはエマからすればかつて「家族」であったレイやノーマンらを喪っているに等しい事態である。

この事態こそがエマら食用児が人間の世界に渡る際に「鬼の頂点」（その名として図1の表記をされるが、以後本稿でこの存在に言及する必要がある場合には「鬼の頂点」とだけ記す）からエマが求められた、約束を結び直す「代償」（エマにとっては「<sup>ごほうび</sup>お礼」）の「きみのせかいから きみのかぞくをもらおう」という取り交わしなのである（第180話）。

最終話でエマはレイやノーマンらと再会を遂げ、以降は共に生きていくことを予兆させる描写が見られる。しかし鬼の世界で育んできた「家族」としての歴史は取り戻されることのないままに、物語は幕を下ろす。

#### 5 エマの喪失③—分身的存在—

エマらがGFハウスから脱獄して人間の世界の存在を知るに至るまでの導き手に、ウィリアム・ミネルヴァことジェイムズ・ラートリーという人物が描かれる。

ジェイムズ・ラートリーには、ピーターという弟がいる。このピーターは物語の黒幕的存在であり、鬼との戦いの後にさらにエマらを窮地に追いやる存在でもある。

エマは食用児である。一方でピーター・ラートリーは、鬼に食用児を提供し、人間の世界を鬼の脅威から遠ざけた側の人間（調停者）である。すなわち両者は共に人間でありながら、断絶した立場に身を置いている。

それと同時にエマにとってピーターは「生まれた時から<sup>たちば</sup>運命を背負わされているのはあなたも同じ」と言わしめる存在でもある（第172話）。エマもピーターもそれぞれの正義と理想のために歩み、互いの運命を背負って交錯をした。この点において2人は、立場や性別、善悪などの点では対立した描かれ方をするものの、根底においては互いの写し絵として描かれているとみるべきであろう。

やがてエマらとピーターの戦いは前者に軍配が上がり、エマは以後は共に生きることをピーターに呼びかける。しかしピーターはエマらが目指す人間の世界は決して理想郷ではないことをエマらに言い残して、自決する（第173・174話）。

このように、エマはイザベラの喪失に先駆けて、正義と理想のために生きたという意味での分身的存在であるピーター・ラートリーを喪失している。

## 6 エマの喪失④—思春期時代の自分—

エマが喪失したのは親、「家族」に関する記憶、分身的な存在だけではない。

鬼の世界で生きていた頃のエマは「全食用児を解放したい」（第97話）という理想を抱き、仲間を率いて困難を乗り越えていく少女であった。武装し仲間を主導する女性というエマの姿は、さながらギリシャ神話のアテナ<sup>\*3</sup>を彷彿とさせる力強さをまとうものである。

しかし既に言及してきたように、2047年の人間の世界に渡ったエマは鬼の世界での記憶をなくしている。渡りから2年が経過した後レイやノーマンらと再会をしても、彼らが誰だかわからず、エマはおののく。ここでエマが見せたのは、逆境をものともせず、不安を振り払いながら生きていたかつてのエマとは打って変わった姿である。

この変化は、エマを支えていた思春期的な理想追求の姿あるいはそれを支えてきた前向きさの消失の表れである。つまりエマが喪ったのは「家族」や「記憶」だけでなく、彼女の言動の根底にあったたくましさや前向きさでもあった。

鬼でありエマの友人でもあるムジカはエマに対して「この子は元々たくましいんじゃないたくましく在らなきゃならなかったんだ」との念を抱いている（第50話）。ムジカが考えるようにエマのカリスマ性は仲間達とGFハウスから、そして鬼の世界から脱獄するという願いに支えられたものであったとする。すると、それらの悲願が果たされて、かつ仲間の記憶をなくした今となっては、かつてのエマのたくましさや前向きさを支えた豊かな内的エネルギーはその役割を終え、彼女の思春期時代までの記憶と共に消失したと考えられる。エマの正義や理想は人間の世界への渡りによって成就するわけであるが、それに先駆けて同じように別の正義と理想を背負っていたピーターが世を去っていることは、上述した通りである。

岩宮（1997）は異界を生きたといえる思春期の事例について述べる中で『『普通』になっていく』ということは、『この世』で生きていきやすくなることであるが、特別な輝きを少しずつ失っていくことにもつながる。この輝きを失う悲しみの部分をどう背負っていくのが治療の大事な裏のテーマになることも多い」と述べる。エマも鬼の世界という異界を生きている間は、皆の希望を象徴する光り輝く存在であった。しかし人間の世界に渡ったエマからはその輝きは失われ、どこにでもいそうで、むしろ不安げな女性として描かれるようになっていく。

上向きの変化に彩られていたエマの思春期時代は物語の最後で終わりを迎え、その後のエマは普通の人間として生きていくという次の人生の段階にさしかかった。『約束のネバーランド』という物語の終わり方は、このように読みうるものである。

以上のように『約束のネバーランド』という物語の終わりとして、幾多もの喪失に彩られたエマの思春期の終わりがパラレルであることを述べてきた。無論、思春期の終わりにおいて現実として親や家族、双子的存在の喪失が生じるばかりではない。むしろこれらの多くは内的な体験として夢やイメージの中で完遂されることも多く、現実のこととしては安易に生じぬように周囲が心を砕いて見守ることも重要である。この点については留意が必要であろう。

## 7 約束のネバーランド

最後に、ここまで言及してこなかった事柄として、タイトルになっている「ネバーランド」

という言葉はどう理解するかという点がある。

ネバーランドはBarrie, J. M.の戯曲『ピーター・パン』に登場する、妖精らが住み、親とはぐれた迷子の子どもたち (Lost Boys) が暮らす、住人が年を取らない土地を意味する言葉でもある。成長するまでに鬼に食料として食べられてしまうという『約束のネバーランド』のあらずじと、年を取ることがない『ピーター・パン』のネバーランドの性質を重ねて考えると、子どもが大人になれない/ならない土地という点が共通していることがわかる。また『約束のネバーランド』で時間が一定に流れない世界を描いた第134話とその話を所収する第16巻の標題はいずれも「Lost Boy」であり、これも『ピーター・パン』の世界でネバーランドにいる子ども達 (Lost Boys) との関連の上で付けられたタイトルであると推察される。

また「調停者」であるピーター・ラートリーには、奇しくもピーターの名が冠せられている。そしてこの『約束のネバーランド』のピーターが死ぬことで「ネバーランド」から「食用児」が解放される。ピーターの存在がネバーランドの存在を支え象徴するという点にも『ピーター・パン』との類似が見いだせる。

子どもが大人になれない/ならない土地であるネバーランドは、『約束のネバーランド』では鬼の世界である。飼育監・飼育者や一部の脱獄者を除けば、作中に登場する鬼の世界での人間側の登場人物は全て子どもである。こうした世界の起源は、鬼の頂点であり2つの世界を司る「鬼の頂点」との「約束」(第141・142話)によるものであった。

しかしエマは「鬼の頂点」と新たな「約束」を交わし(第142話)、後に全ての「食用児」を解放し、両世界の行き来を未来永劫閉ざすことに成功する。この瞬間というのは、鬼の世界が残りをするものの、もはや鬼の世界が子どもたちにとっての「ネバーランド」ではなくなった瞬間である。

物語内の時間の経過を積算すると、物語の最初に11歳だったエマは、渡りから再会のときには15, 6歳と推定される。そして子どもたちが大人になることが可能になることと前後して、エマは上述してきたように多くの喪失を経て、自身の思春期の時期を終える。

以上に述べてきたことが『約束のネバーランド』における「ネバーランド」の終わりであり、主人公エマの、あるいは彼女の周囲を彩った仲間たちの、子ども時代の終わりである。

#### IV おわりに

本稿では『約束のネバーランド』を素材として、思春期の終わりについて考察を行った。岩宮(2013)が思春期と喪失は切っても切れない関係にあると指摘するように、思春期の終わりは多くの喪失に彩られる。敷衍すればこれは思春期のみならず、人が変容する過程には付いて回る事柄である。

先行研究と本研究でみてきたように『約束のネバーランド』は思春期の終わりを理解する上で良質のテキストである。一方で自立、仲間作り、自らの異能感の喪失というこれらのモチーフは、思春期に関するオーソドックスな理解ともいえる。人間関係のあり方が急速に変化する現代において、本研究で得た理解がどれほど一般的なものとして通用するかという点については、臨床素材による考察等を通して引き続き検討する必要があると感じている。

- \*<sup>1</sup> ただし『約束のネバーランド』にはいわゆる恋愛ものの要素は少なく、思春期の身体的成熟に関する描写等も薄い。この点においては心理社会的要素の方が濃いとして、内容としては青年期について扱う作品とみる向きもあるだろう。
- \*<sup>2</sup> 人物等についてのより詳細な説明は西嶋（2020）でも行っているため、必要に応じて上記文献を参照されたい。なお、本作の単行本の裏表紙には「脱獄ファンタジー」という紹介がなされている。それに倣い本稿でも「脱出」を意味する際には「脱獄」の語を用いる。
- \*<sup>3</sup> 『鬼滅の刃』の鬼の始祖である鬼舞辻無惨が誕生したのも物語の千年前のことである。週刊少年ジャンプで同時期に鬼を扱った2つの作品で、物語の発端がそれぞれの物語の千年前に遡るという一致を示したことは、偶然にせよ興味深い符合であると考えられる。
- \*<sup>4</sup> 本稿では江國香織（訳）（2021）『青い鳥』による訳語を用いている。
- \*<sup>5</sup> エマに関する連想の中で記したアテナは、ローマ神話ではミネルヴァである。この名は『約束のネバーランド』で食用児を人間の世界側から支援したジェイムズ・ラートリーが名乗ったウィリアム・ミネルヴァという名に通ずる。ウィリアム・ミネルヴァは食用児たちに世界のヒントを示す際にフクロウの意匠を用いており、これはミネルヴァのフクロウを意識した表現であると類推される。このようにウィリアム・ミネルヴァという名には導き手としての意味合いが託されていることがうかがわれる。

## 文献

- 1) 吾峠呼世晴（2016-2020）. 鬼滅の刃 第1巻～第23巻. 集英社ジャンプコミックス.
- 2) 伊藤美奈子（2006）. 思春期・青年期の意味. 伊藤美奈子（編）. 思春期・青年期臨床心理学. 朝倉書店, pp.1-12.
- 3) 岩宮恵子（1997）. 生きにくい子どもたち. 岩波書店.
- 4) 岩宮恵子（2000）. 思春期のイニシエーション. 河合隼雄（編）. 講座心理療法1 心理療法とイニシエーション. 岩波書店, pp.105-150.
- 5) 岩宮恵子（2013）. 好きな人にはワケがある. ちくまプリマー新書.
- 6) 河合隼雄（1989）. 生と死の接点. 岩波書店.
- 7) 西嶋雅樹（2010）. 漫画『蟲師』にみる心理学的イメージについての考察. 甲南大学学生相談室紀要, 17, 39-51.
- 8) 西嶋雅樹（2020）. 漫画『約束のネバーランド』にみる思春期・青年期の心性. 島根大学こころとそだちの相談センター紀要, 3, 11-20.
- 9) 西嶋雅樹（2021a）. 新型コロナウイルスと『鬼滅の刃』. ユング心理学研究, 13, 67-78.
- 10) 西嶋雅樹（2021b）. 竈門炭治郎と鬼舞辻無惨. 島根大学こころとそだちの相談センター紀要, 4, 15-22.
- 11) 清水将之（2003）. 思春期を生きるということ. 児童心理, 57(3), 2-11.
- 12) 白井カイウ（原作）・出水ぽすか（作画）（2016-2020）. 約束のネバーランド 第1巻～第20巻. 集英社ジャンプコミックス.